

# 対人援助学&心理学の縦横無尽(3)

## アーサー・フランク先生、 三度目の来日(滞在記)



### サトウタツヤ@立命館大学

カルガリー大学教授・アーサー・フランク (Arthur W. Frank) 先生がこのほど三度目の来日を果たされました。彼は『傷ついた物語の語り手: 身体・病い・倫理』などで知られるナラティブ研究の第一人者です。

子どもの頃に一度来たという話を聞いた気もしますが、それを除けば、学者として最初に来日したのが、第二回・日本質的心理学会(東京大学)での招待講演の時です(2005)。京都にもきませんか、ついでに京都に是非どうぞ、とお誘いしたのが、立命館大学との縁でした。立命館大学 GCOE「生存学」創成拠点(立岩真也教授代表)の招きで再来日を果たしたのが 2008 年のことで、そして今回も同じく GCOE「生存学」創成拠点の招きで三度目の来日となったのでした。

最初の来日の時はゼミ生と一緒に奈良にいたりもして、名前さながらのフランクさに私はすっかり魅了されてしまいました。学生がカナダでインターンシップをしたいと言ったところ、あとで書類の添削までしてくれました。彼は自分自身のことをアート、と呼んでくれということで、以下ではアートと書くこともあります。

アートは今回、外部評価の一環として来たのですが、そんな内輪の仕事だけではモッタイナイ(今や国際語)ので、公開講演会も開きました(2011年8月28日)。

“Holding One’s Own as an Art of Living: Reflections on Companion Stories and Narrative Analysis”

というタイトルです。講演の内容そのものについては論文として本拠点の“*Ars Vivendi Journal*”に掲載されるはずなので、それを楽しみに待っていてほしいのですが、簡単に説明すると、「Holding One’s Own」を文字通り訳せば「自分を下から支え持つ」ということになります。英語的には意味が転じて「自分らしくあることを守る」「\*\*には屈しない」という意味の口語的表現になるそうです。「Art of Living」は生の技法。じつは GCOE で用いている「生

存学」という単語の原語が「Ars Vivendi」なので、それと合わせてくれているわけです。こういう気遣いがうれしい。「companion stories」は、同伴者としての物語、とか、その人と共にある物語、などと訳されます。ただし、複数形になっていることに注意したいところです。以上をまとめると、タイトルは

生の技法としての「自分を持ちこたえること」

同伴者としての物語とナラティブ分析についての省察

となるわけです。今回の講演でさすがと思ったのは、同伴者としての物語が必要な場合も多いが、この物語によって、他者との関係が切断されてしまう可能性についても批判的に捉えていたことです。自分を守ることが他者を傷つけることにならないようにしなければいけないことを私たちは深くとらえる必要があります。

難しい話はこれまでにして、今回もアートと一緒に少しだけですが京都巡りをしました。といっても、既に2回来ているわけですから、場所には迷いました。結果的に、マンガミュージアムと細見美術館に行くことになりました。



マンガミュージアム、日本語が読めないから退屈するのではないかと思ったのですが、まず、多くの展示に英語が表示されていました。これは驚きました。また、京都精華大学の協力を得ているので、研究書があったり、各国に翻訳されている日本のマンガがあったりして、英語で読めるものもそれなりにありました。しかし、アートはそういうものよりも日本のマンガそのものを堪能していました。アートは日本語が読めないなりに、各年代ごとのマンガをちゃんと味わっていたのでした。そして、1970年代以降の日本のマンガは基本的に変わってないのではないか、という感想と、攻殻機動隊などは少し違っているのではないか、という感想を私に対して述べたのでした。私はマンガの知識などないのですが、現代のマンガが手塚治虫によって作られその影響をうけ、脱しようとしつつも脱しきれない、というような宣言的知識はあるし、アキラとか攻殻機動隊の位置も少しは知っていたので、ちょっと驚いたのでした。

もう一つ



というようなコーナーがあり、ここで興味深い話を聞かせてくれました。ここには

Manga is a kind of story-telling, which unfolds the narrative by means of sequential frames, or panels.

というようなことが書かれており、Story と Narrative という語が両方でできます。ストーリーとナラティブってどう違うの？ということは私ならずとも気になるのですが、アートの定義はこうです。

ナラティブは、時間の経緯とともに出来事がおきる、ということで、一般的な構造のようなもの。それに対してストーリーは、登場人物がいて、オチがあって、わくわくするようなもので、具体的なもの。

彼の定義において、ナラティブの典型の一つが天気予報。時々刻々と事態が移り変わっていくものもナラティブに入るというわけです。先のパネルに戻ると、一枚の絵や写真はナラティブたりえない。しかし、そこからストーリーを読み解くことは不可能ではない、というようなことを言っていたのです。彼自身もこの定義だけが絶対ではないと言っていましたが、こういう考え方も一理あるでしょう。彼がナラティブの類型と言って、ストーリーの類型と言わないのもこうした定義に依拠しているからということのようです。

難しい話はオシマイといいながら、また戻ってしまったので、話題を転換。有馬啓太郎という漫画家とその作品『月詠 (つくよみ)』というマンガをご存じの方はいますか？



この方は、今回のアートの来日にあたって、通訳などを務めてくれた有馬斉・東大特任助教のイトコさんだということです。せっかくだから、見てみようと思って司書の方に聞

いたら、なんと開架で読み放題さわり放題という扱いではなく、閉架に保存されていたのです。研究用ルームがあり、そこで閲覧希望を出さないと見ることができないのです。せっかくだから、出してもらいました。先客の方は『ガロ』を請求して山積みにして研究ノートをとってましたが、こちらに来たのは何の変哲もないマンガ。何がすごいのだろうと思ったら、なんとこのマンガは女の子の「ネコミミ」をマンガ界にもたらし、ひいては日本文化にもたらしたマンガの一つだということです。またアニメ化にあたっていろいろな実験的なことがなされた、ということで、歴史的な作品なのだそうです。たかがネコミミ、されどネコミミ、でしょうか。何事にも始まりはあるのですが、ちょっとびっくりしました。

なんてことを書いているとキリがない。細見美術館は記念写真だけ。小さいけれど、若沖の特別展があったりして楽しめました。

